

グループ療育の実践 ～思春期の子どもたちへのグループ療育を行うことの効果について～

地域生活総合支援センターきらら

こども発達支援センターSun

田中すみえ 福田美咲 紀平亜希

平成 28 年 6 月 Sun の卒業生 5 人の利用者の協力を得て、思春期年齢の児童に対するグループ療育を試行的に開始した。29 年度からは放課後等デイサービス事業の中でグループ療育を行い、前年度の利用者に引き続き研究協力への承諾を得て、自分たちで立てた目標を達成するためのプロセスを学ぶ機会を提供し、グループの効果についてこどもの行動チェックリストを用いて測ることとした。

1 はじめに

こども発達支援センターSun（以下 Sun と表記）は、17 年 4 月「大阪府発達障がい児療育支援事業」により整備を進められた発達障がい児の専門療育を行う事業所として設置された。平成 24 年 4 月、療育事業が府から市町村へ移管された後からは南河内圏域 9 市町村から委託を受け、概ね 2 歳から小学 2 年生までの発達障がいの診断を受けた子どもとその家族、及び発達のサポートが必要な家族に個別の専門療育を実施している。『早期療育』『療育の機会をより多くの子どもと家族に』という事業の性質上、新規利用者優先の利用決定となるため、一年度限りの利用となることが多い。卒業生には都度支援員がアフターフォローとして相談に応じることで、子どもへの対応は家族が行うというスタイルになっていた。しかしながら、年々増加する相談に対応する中で、特に思春期年齢の子どもへの支援ニーズが高いことを感じ、年齢に合わせた目標設定を行い、自己決定のプロセスを支援することが、自尊心を高め今起きている困りごとを解決することにも効果があるのではないかと考えた。

そこで 28 年 4 月当時、小学 4 年生から小学 6 年生であった子どもとその家族 5 世帯に試行的グループ療育へ参加を依頼しグループ療育をスタートさせることとした。また、当年は研究活動推進助成を利用することで子どもたちが目標としてセッティングした、親元を離れて自分たちで困難を解決する環境「グループ旅行」への支援を実施することができた。そして、グループ療育の効果検証として、ASEBA（Achenbach System Empirically Based Assessment: 実証に基づく Achenbach の評価システム）を参考に効果検証を行った結果について以下に紹介したい。

2 グループ療育の実践について

(1) グループ療育は、月 1 回土曜日、1 回 2 時間の活動で、発達年齢と生活年齢を参考にしながら、「グループでやってみたいこと」「今興味があること」について面談時に本人が伝えたことを重視して、支援員がグループ編成をしている。話し合いを通して、自分たちで決めること、失敗してもやりようがあることを含めグループならではの経験を積むことを目的に支援している。また、2 時間の活動の中でライフスキルの内容を知識として習得するための時間「ワンポイントアドバイス」や自己評価・他者評価の時間として「振り返りの時間」を設けている。

個別療育を経てグループ療育にステップアップしたことで、構造化の利用の仕方や評価と目標設定の方法について、子ども達と支援員に共通言語があり、意図の共有のしやすさがあった。このことから、Sun がこの療育を展開した意義があったといえるかもしれない。

今回の実践報告の子ども達は 28 年から数えて 3 年目になるグループの子どもたちである。グループ名を<四季島>と自分たちで付けたように、電車好きの子どもが 2 人、電車には特に興味はないけれど、体験を通して新しいことへのチャレンジをしてみたい子どもが 2 人の計 4 人が在籍している。

1 年目は支援員が各回のプログラムを用意することで、家事活動や地域でのレクリエーションへの参加を通してグループとしてのまとまりを作ってきた。

2 年目はやってみたいことが明確になり、一人ひとりが各回の活動内容を企画し、計画・実行・振り返り・改善点を考える PDCA サイクルを積み重ねていた。各回の企画は、「電車の写真をとろう」「写真をパソコンで編集しよう」「恵方巻きを作ろう」「アイススケートをしよう」「きらら祭りで働いてみよう」などがあった。祭りの機会に出店することで就労模擬体験をすることは以後グループ療育の恒例となった。ワンポイントアドバイスの時に用いた教材【※資料 1】により企画のプロセスを視覚化した。

また、毎回の振り返りで支援員が子ども達の良かったところをフィードバックしている姿を見る回数が増えてくると、子ども達自身がお互いの良いところについて手を挙げて発言することがみられるようになった。PDCA サイクルを実感しながら、活動を通して、ライフスキルの内容を楽しく学ぶ機会になるよう、支援員のワンポイントアドバイスのコーナーは継続している。

毎回の振り返りを積み重ねてきたことで、就労体験の後には就労移行支援事業や就業・生活支援センターで用いられていたアンケートを編集して作成した振り返りシート【※資料 2】を記入してもらうことも定着し、自己評価と共に次の目標設定を本人、支援員、家族で共有している。

3 年目の始めに今年度やりたいこととして彼らが希望に挙げたのが、「もっ

と難しいことをしたい」「もっと遠くへ行ってみたい」「学校行事や家族とのお出かけではないスタイルで、自分たちでチャレンジしたい」というものであり、話し合いの結果、『電車旅行』を目標にすることになった。【※資料3】

これまで経験したPDCAサイクルで、旅行実現のための計画を立て、まずは資金援助を家族に依頼するために就労模擬体験として地域のバザーに出店することを企画して参加した。しかしながら自分たちの自慢の電車グッズを紹介したものの思ったような反応を得ることができず、アピールの方法を工夫し、人気のあるものをリサーチすることが有効であるという経験を積むことができた。また、興味関心を多くの他者と共有することの難しさを感じつつも、「S君、あれ知ってるかぁ」「あー知ってるよ」「学校みんなは知らんけどな」の会話にあるように、Sunのグループ療育だからこそ共有できる話題を楽しみにしている場面をみることができた。彼らが旅行のために努力したことに家族も資金援助を申し出てくださり、研究活動推進助成を活用することで、学校行事ではないけれど、大人が同行する『電車旅行』を実現することとなった。

その後は行き先の選定、交通機関の利用方法、必要なもののリストを作るなどオリジナルのしおり作りを自分たちで行いながら、グループ内で役割分担を行い支援員の援助を得ることなく進めていった。オリジナルしおりの1ページ目【※資料4】の内容で、持ち物欄に「やる気」と書かれていたことに支援員は微笑ましい気分させられた。

(2) 電車旅行の行き先は『浜松』となり、電車好きチームは各駅停車を利用してたくさん写真を撮ることを目標に浜松を目指し、新幹線の初体験を楽しみにしていたチームは駅弁を楽しみながら浜松を目指した。電車好きの2人は電車の撮影に没頭したい気持ちを抑えつつ、時刻表を気にして移動することや、観光地の過ごし方「浜松城くらいは行ってみようや」と他の参加者への配慮をすることがみられた。

宿泊先はキッチン付の部屋を予約し、これまで経験してきた調理体験のスキルを元に自炊で夕食、朝食を作った。メニューの希望を一人ずつに聞きながら決定することや、買い物リストを作る人、買出しに行く人の役割分担など、支援員の数を含めながら計算するといった企画のスキルも上達しているとまたまた支援員が感動させられる場面もあった。



*夕食：カレー、豚肉と野菜の炒めもの



*朝食：牛丼、豆腐とわかめの味噌汁

夕食作りは調理器具に不具合があったこともあり、時間が思ったよりかかったなど、やはり計画通りにいかないことも経験したが、一人ひとりが調理に加わり一品ずつ仕上げた。

また入浴前に、普段の療育では行うことのできない入浴場面への支援として、髭そりのワンポイントレッスンをしたり、余暇時には卓球大会をして大人も子どもも一緒に汗を流して遊びを共有することもできた。

髭そりのワンポイントレッスンの時にはどうしたらいいか、どうなったら終わりか、具体的な方法を知らないために行動が消極的になりがち(サボっている、わざとやらないなどの誤解を受けやすい)特性に配慮して教材を作成し、今後もツールを使用して一人で取り組むことができることを目指した。



*正しいシェービング方法

3 グループ療育の効果について

グループ療育の効果検証のツールとして、ASEBA (Achenbach System Empirically Based Assessment: 実証に基づく Achenbach の評価システム) を参考にし、年度始めには CBCL (Children Behavior Checklist こどもの行動チェックリスト: 親や教師など子どもの様子をよく知る人が記入する) と YSR (Youth Self-Report 自己評価表: 子ども自身が記入する、以下 YSR と表記) を使用した。年度末の結果を得るために YSR への記入は旅行中にできるように、i-pad で入力できるようにして浜松まで持っていったことで、子どもたちが年度始めに漏らしていた「えーいやや」「めんどくさいな」の声を聞くことなく、スムーズな回答を得ることができた。余談になるが、回答のしやすさに配慮することも書字や読字が苦手な子どもたちに調査依頼をする時に必要な配慮であると気づ

かされた。

ここからはYSRを個々に比較して療育の効果を検証してみたい。

A児は小学6年生で28年度試行的グループ療育から参加している。家庭内とその他の場所では様子が違うことも多く、時に攻撃的な行動（いわゆる「大暴れ」）が見られていた。グループ療育の中で電車好きのメンバーに刺激を受けて、電車の撮影のために公共交通を利用して出かけていくことや、料理に挑戦してみることなどで経験を拡大してきた。今回の電車旅行を積極的に企画したのも彼だった。年度末YSRでは、自分を傷つけたり、人を傷つけたりというような攻撃性の減少、こだわり行動の減少、不適切な行動で人とかかわろうとする行動の減少がみられ、周りとやりとりをしようとする行動（対人関係）、自信の項目が向上していた。

B児は中学1年生で28年度試行的グループ療育から参加している。感覚への過敏性があり、日常生活において家族や学校に相当な配慮をしてもらうことや対人関係の調整を個別に行ってもらっている。土曜日療育の愛称『Rockōn』（ろっくーん）やグループ名＜四季島＞の発案者で、みんながkon（kyoto 京都・osaka 大阪・nara 奈良）から集まってくる、どんな地域（Region）も超えて羽ばたきたいと名づけた電車博士、メンバーからも「社長」と呼ばれ、信頼を得ている。年度末YSRでは、不安の高まりによるこだわりに関する項目が増加していたが、人との良好な関係を築きたい、他者の視点を気にする、人と比べて自分は得意なことがあるなど、対人関係や自信の項目も増加していた。

C児は29年度から参加している。週末には必ず電車撮影に出かけていき大金をつかってしまう、自室には置ききれないほどのエヌゲージ（電車模型）を所有しているが片付けられない、時間感覚が乏しく遅刻が多いと他者から指摘される経験がたくさんあった。年度末YSRでは、興味関心を追及する事へのこだわりについて変化はみられないものの、多動性の項目について改善傾向がみられ、人と比べて自分は得意なことがあるなど、自信を継続することができていた。C児の回答の特徴であった頭痛、吐き気、腹痛など体の不調を訴える項目や不安に関する項目のポイントも減少していた。

D児は小学6年生で28年度試行的グループ療育から参加している。学校での対人関係のストレスを家庭内に持ち込んで混乱するので家族も本人も困っている様子がみられたが、学校と家庭ではまったく別人のような様子になるので、情報共有することやコミュニケーションスキルを練習するタイミングを計る必要があった。＜四季島＞の活動を楽しみにしている半面、「遊び時間が少ない」と地域の友だちと遊ぶことや就労模擬体験の機会を選んで参加することを優先していた。支援員も‘報告する’‘相談する’スキルについて重点的にかかわりを行ってきた。D児は旅行前夜から「いかない」と意思表示をした。当日朝に

なっても、家族が説得を試みても気持ちがかわることはなく、「卒業式が不安」「覚えることがあるから（旅行にいったら）時間がたりない」と具体的に理由を支援員に伝える事ができた。よって旅行中の YSR は実施できていない。

YSR 及び D 児のエピソードから、グループ療育の効果として、以下のようなことがあげられる。

- 1) グループにすることで発達障がいの人が苦手とする客観的視点に立って自分自身を振り返ることができるようになった
- 2) 活動を通し新しい経験を積み重ねてきたことで視野を広げることができた
- 3) 自分の独特な興味関心を共有してもらえる機会が少なかったり、うまくいかない傷つき体験ともいえる経験がある彼らが目的を同じにして活動することで‘つながる’ことへの意識が向上した
- 4) 一人ひとりの得意分野をそれぞれが追求し共有できる相手がいることで自分は自分でよいという自信をもつことができた

4 今後に向けて

ASEBA を参考にして十分な効果検証するにはまだまだ数年かかると考えている。グループ療育の参加希望者が年々増加していること、Sun に委託されている大阪府通所支援事業者育成事業(*) の利用希望の大多数が放課後等ディサービス事業者であることを鑑みると、思春期の子ども達への支援ニーズは高い。子どもたちは思春期独特の課題に直面するものの、障がい特性の一つであるコミュニケーション障がい、イメージーションの障がいから本人と家族資源だけで立ち向かうには負担が大きいと考えられる。グループ療育のような取り組みを積み重ねることを通し、子どもたちの自己肯定感 self-esteem の向上を図り、社会で支える仕組みづくりを目指すためにも今後も安定したグループ療育の運営と十分な効果検証を行っていききたい。

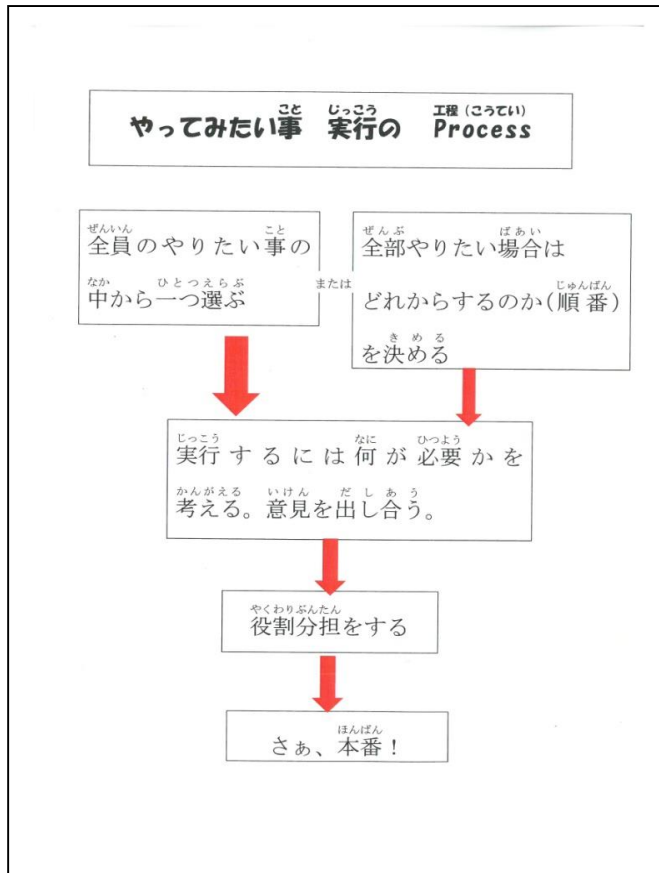
また、支援員のグループ療育のスキルをあげていくことや、個別療育を土台に、子どもと家族、支援員の共通の体験を通して年齢に合わせた課題に立ち向かうことができるよう、共にステップアップしていく必要がある。

本人が笑顔で自信をもって「自分は自分でいい」と言える毎日にしていききたい。

*大阪府障がい児通所支援事業者育成事業

大阪府の療育拠点 6 ヶ所に委託されている事業で、Sun は南河内地域の通所事業所における人材育成、機関支援（コンサルテーションを含む）、相談を行っている。

※資料 1 実行の process



※資料 2 就労体験後振り返りシート

職場体験振り返りシート

名前: _____ 体験した日 平成 年 月 日 時 ~ 時

よくできた...◎ できた...○ あまりできなかった△

大項目	具体的項目	項目	チェック	感想	どんな気持ちでしたか?
基本の職場実生活	身だしなみ	法服にふさわしい服装ができましたか。(エプロンをつけていたか)	<input type="radio"/>	1) 出来た点、頑張った点 はん売	もうやりたくない しんどかった ふつう たのしかった うれしかった すごくよかった
		よい姿勢でお仕事できましたか	<input type="radio"/>		
	あいさつ・言葉づかい	自ら集めてあいさつすることができましたか	<input type="radio"/>		
		スタッフから誘われた時に返事ができましたか	<input type="radio"/>		
働く中で感じたこと	仕事のルール	決められた仕事(決められた役割)ができましたか	<input type="radio"/>	2) 出来なかった点、失敗した点 ない 3) これから自分で頑張らないといけないと思った点 さんの仕事 4) さらさらの感想 楽しかった。	
		集中して仕事に合うように頑張れましたか	<input type="radio"/>		
	持続力	決められた時間が経ちましたか	<input type="radio"/>		
		約束の時間まで仕事を続けることができましたか	<input type="radio"/>		
	態度	でいいに仕事をすることができましたか	<input type="radio"/>		
		仕事に慣れていなくなったり飽きりませんでしたか	<input type="radio"/>		
	上手にできたか	自分の思い(～がしたい、休憩したい)などを伝えることができましたか	<input type="radio"/>		
		アドバイスをもらった時に返事(わかりました、はい、など)ができましたか	<input type="radio"/>		
作業がスムーズにできたか	わからないことはスタッフやお友達に聞くことができましたか	<input type="radio"/>			
	手順(仕事の進め方)を覚えることができましたか	<input type="radio"/>			
	ミスなく仕事ができましたか	<input type="radio"/>			
	ミスが無いかを自分で確かめることができましたか	<input type="radio"/>			
	スムーズに仕事ことができましたか	<input type="radio"/>			

※資料3 やりたいことアンケート

Rock on member へ

2018年度がいよいよスタートしました。
 今年度も自分たちで考えチャレンジしていくことを目標にします。
 自分がやりたいこと、もっと知りたいことなど一概に考えてください。なぜ
 やりたいのか 他のmemberにアピールできるように準備してください。

おどまろ
 お料理チーム
 おぢかしいおせんべい。
 休むくらの工夫して、大人
 の準備をする。

※資料4 オリジナルしおり

もちものリスト	スタッフ
● 金	● _____
● 飲み物	● _____
● 服(一式) BO UKANGU	● _____
● 防寒具	● _____
● パジャマ(寝巻) PAJYAMA NEMAKE	● _____
● 歯ブラシ HA BU RA SI	● _____
● ゲーム(条件付) GE - MU JYOUFENTUFI	● _____
● カメラ(携帯可) KAMERA KEITAI KA	● _____
● やる気 YA RU KI	● _____
● SONOTA HITUYOUNAMONO HA KAKUJIDEMOTTEKITEKUDASAI その他 必要な物は各自で持ってきて下さい!	